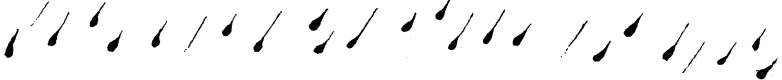




自閉症の子どもに 特別な保育はあるか

津守 真

一九七〇年頃の母親懇談会で「自閉症」には特別な治療教育が必要かが真剣な話題になったことを、前々号の本誌に記した。その後私は障碍をもつ子どもの保育に多くかかわってきたが、自閉症に特別な保育があるとはどうしても考えられない。どの子どもにも共通のこまやかな保育があるだけである。現在もなお同じ質問にぶつかるので、ひとりの子どもの保育の過程について記そうと思う。



—その子は手のひらを目の上にかざしてひらひらさせた。当時、これは「手かざし行動」と名付けられて、自閉症の特徴と考えられていた。子どもはその世界に閉じこもるから、やめさせなければいけないという考えが一般であった。私はこの子は本当は何を見ているのだろうかと思ひ、その子に近寄って同じように目の上で手をひらひらさせてみた。太陽の光が木の葉の間から、指のすきまから射して、その美しさに驚いた。この子は美に対して特別にセンシティブなのではないか。私がそう思っただけで見たらとたんに、その四歳の子が私を見て、にこっと笑った。そこからその子とのつき合いが始まった。

次のとき、その子は砂に37、38、……と数字を書いていた。これも自閉症の特徴と言われる行動である。私はそばに座って一緒になつて数字を書いていると、ときどき私を見た。急に砂を指先にひとつまみつかんで、私の頭の上へのせ、「ポーシ」と言った。私は意外な展開に驚きながら、顔をおおげさに振つて砂を落とすとケラケラ笑つた。動きは更に大きくなり、頭だけではなく砂を背中にもかけた。私が後ろを向いて「ヤッター」と言うときケラケラ笑い、ふざけ合つた。その朝はこういうことを何回も何回もやつた。この子は自分の世界に閉じこもっているところではない。私との相互のやりとりを楽しんでいる。




滑り台に行ったので、私もついてゆくと、階段の途中で待っていて私を見てニコと笑う。そうしているとき急に姿勢をかえて、タイヤを回しはじめた。この子は気持ち切り替えるのがぎこちない。物を手に持つことも、手から放すことも不器用である。私は、水と泥の遊びによって、この子の自然性を回復しようと考えた。物質と直接ふれる遊びを幼児は好むが、子どもによっては観念が先行して、じかに物に触れることが不得意である。そういう場合には、保育的工夫が必要になる。

四月十七日（一九七六年）

砂場で水を流し、シャベルで砂をいじっている。母はこんなに砂遊びをするのははじめでだと言う。私が水に湿った砂を手渡すとちよつとさわつて落とす。砂が手につくと洋服でふく。それを繰り返していた。そのうちに砂を少し手に握って投げた。そのうちに小さな石をフェンスの外に投げた。投げたと記したが、手から放したと言った方がよい。

四月二十四日

登園するとすぐに砂場に入る。母はこの子はこの頃水に憑かれたみたいだと言う。水と砂がぐしゃぐしゃになったところに手をいれ、握ったり放したりしてかきまわす。私も手を入れて同じようにしてみると、何かもやもやした気持ちに出口がでることが分かる。こうして物質の感覚に注意を向けながら付き合っていると、砂遊びが



長く感じられない。

五月一日

水道を強く出して圧力をたのしみ、原始的な水の遊びをしていた。雨上がりの水たまりの中にはだしではいいり、とても楽しそうだった。この子にとつての水はこれまで禁止されてきた領域であり、その境界をはみ出す水である。今日は水の中に自分の足を入れた。この子はときどき手かざしをして太陽の光線を楽しんでいるが、それよりも、砂と水に直接にふれて遊ぶことの方がもつと面白くなった。

七月三日

水に砂を入れる。バケツを庭の真ん中にもつて来て水の中に土をつかんでいれる。それからコップで水をくみ出して土の上にかけて。数十回繰り返し返した。濡れていないところにバケツをおく。つまり自分は水に濡れないところに立って、手だけで水をいじるのである。雨が降って来てもつづけける。

十月十六日

トランプポリンでとぶとき、私が1、2、3とかけ声をかけると、3で高くとぶ。降りたところできすぐるとケラケラ笑って喜ぶ。何十回も繰り返し返す。飛んでいるとき目をつぶっている。目を閉じて飛ぶときは理性の外に出て自由になっているみたいである。毎日、長時間これをやった。



四月十一日（一九七七年）

いつも入れる部屋に鍵がかかっていた（幼児のグループと養護学校とが合併した第一日）。この子はこれまでと違う部屋に入ろうとしなかった。私は砂をもつて傍にいった。弟と砂をこぼして（手に握って放して床に落として）遊んだ。それから私に砂をかけてケラケラ笑った。手放すことが他人との間の遊びになっている。ふだんと違う環境で、はじめ私に警戒していたが、砂をかけて遊ぶことによって関係は回復された。

四月十九日

庭で、私が水を汲んで来ると水をざーとあけた（水を容器から手放すのと同じイメージ）。それからたらいに水を入れ、水の中に入って遊んだ。他の子どもたちが砂場の水たまりにいて中で調和して遊んだ。私は一生懸命水を運んで、長続きするようにその場を保った。ゆっくり遊ぶことと、自由空間のひろがりができるようにと私は考えてそこにいた。手だけではなく、水たまりに足を入れ、両手でかきまぜ、泥を寄せ、掴み、ぐにやぐにやにしたりしている。それをずっとやる。

ホースから庭の真ん中に水をとばす。空の美しさが印象的だった。

家に帰り、父に幼稚園にいったと自分から話し、明日も幼稚園に行くと言う。

五月十二日

やかんに水をいれ、やかんの口から水を出すのを繰り返した。やかんは人間の身体に類似している。「デタノ ウンウンデタ」と言う。このときにはこの子の便秘のことを私は知らなかったが、排泄に関心があることは察せられた。弟が水道の口にホースをさしこむと、じきにこの子がホースをとり、やかに水をいれてこぼす。やかんが重要である。このように他の子どもとの間にコンフリクトも生ずるが、それくらいこの水の遊びが面白いのである。

水たまりにプラスチックの葡萄が落ちているのを見つけ、容器にいれ、「銀の葡萄」と言う。葡萄が落ちるとすぐに拾い、水に入れる。ほんとにきれいな球である。この球は彼にとつて大切なものであるらしい。

五月二十三日

オランダのフェルメール先生が来訪された。この子の砂遊びを見ていて、「砂をいじる身体感覚がもとになって、イマジネーションの世界がその中から開ける(enfaltenする)」ことを熱く語られた。この子を見てみると、物質のイメージがふくらむにつれて生活しやすくなることがよく分かる。

この子と私の日常はまだつづく。